

## 中学校における授業改善に向けた校内研修の取り組み

### — 教科の枠をこえた取り組みを通して —

厚木市教育委員会 青少年教育相談センター  
古屋 公詳

#### 1 研究の目的

本研究の目的は、中学校の教科指導において、教員が協働的になる体制をつくり、授業改善を図ることである。

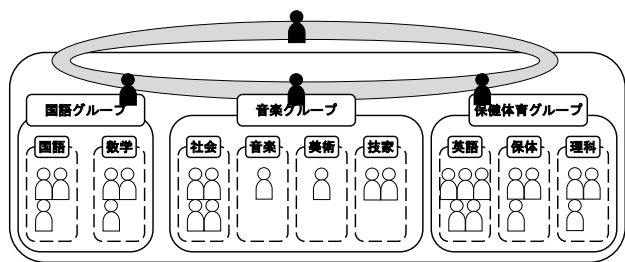
なお、本研究においては、「協働」とは複数の教員が、目標を共有し、その実現に向けて力を合わせて活動することを示し、「授業改善」とは自らの授業の課題を把握し、いろいろな視点から改善策を見出し、今後の実践につなげることができることを示す。

#### 2 研究の仮説

教員間が協働的になることで、自らの授業改善につながるであろう。

#### 3 課題解決方法

教科の枠をベースにしながらか他教科の教員とも学べるよう、教科の枠をこえた研究グループを編成した。



事前の指導案検討から参加することによって事後の研究協議がさらに深まると考え、事前研から、教科部会・教科の枠をこえた研究グループにおいて、指導案検討を実施した。

#### 4 まとめ

教科の枠をこえた研究グループで指導案検討することによって、授業提案にたずさわる教員が限定されず、全教員が授業研究の学びに参加できただけでなく、他教科の授業実践が自らの授業改善につながったことも明らかになった。

他にも、全学年を一人で担当する教科や、教科部会がうまく機能していない教科にとっても、孤立化を防ぐだけでなく、自らの授業実践を振り返る機会となった。他教科の実践を知るだけでなく、多くの教員と1つの授業について議論を重ね、お互いの授業観や指導観、子ども観を交わしていく過程をとおして、自分の「観」を再確認したり、再構築したりすることができた。教科には、それぞれの強みがある。それを各教科の教員が知ることによって、つながりを持った授業をしていくことにつながる。そうすれば、生徒にとっても単発な授業ではなく、すべてがつながり、意味のある授業になると考える。

このように、教科をこえたグループでの指導案検討は、教員だけではなく、子どもの学びの視点からも有効であることがいえる。

#### 5 今後の課題

他教科の授業を参観するときは、表面上の教授技術やその教授技術による生徒の反応に注目する。さらに、即効性のある効果的な指導法に目を奪われる傾向がある。

教科の枠をこえた研究グループでは、教科の専門性という面においては限界があるが、授業の根幹を成している単元構想を立てることは、すべての教科に共通している事項である。教科の枠をこえた研究グループにおいて、そこに視点をおいて指導案検討や研究協議を重ねながら、授業づくりをすることの意義は大きいと考える。

一方で、課題もある。それは、「会議時間の確保」の問題である。教科部会に比べ、教科の枠をこえた研究グループは人数が多いため、出張等もあるため全員で集まることが難しい。また、当初は、他教科の指導案検討に参加して、何の意味があるのかと疑心暗鬼な教員もいたことも事実である。授業を参観することもそうであるが、慣れは必要である。そのためにも、今後の継続的な取り組みが必要である。